
駅前

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駅前

【Nコード】

N5067A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

駅前の哀愁漂うインスピレーションのみで書いた作品。

「えっと…つまりは…」

「始まりがあれば、終わりがあるってこと？」

「そつち。」

「なんにしても…始まらなければ、なんにもならないじゃないか。」

「でも、それは僕らが決めることじゃないだろう？」

「この本を手にとってくれた物好きな人がこの物語を始めるんだ。」

「つまらないかもしれないよ？」

「まあ、なんにしても…」

「まだ、始まってすらいないんだ。」

夕闇が滑るようにやってきて夜が訪れるまでには、そんなにはかからない。

ついさっきまで賑やかだった駅前も、今は静まり返っていた。

吸い込んで、吐き出すのに疲れた列車が、小さくなっていく。

まばらな影達は下を向いて散らばっていく。

朝はあんなに多くの人間を集めていたのに。

帰る場所がある人は、急ぎ足で、屋根のある暖かい部屋を目指した。

帰る場所がない人も、とりあえず家を目指した。

夜が幾分か濃くなると、完全に人が消え失せる。

くたびれた列車も今日は眠る。

僕は、僕らは……。「もう誰もいなくなってしまった」

誰に云うでもなく僕は云った。

あんなに手を振っていたのに、あんなに楽しかったのに…

夜は熱を奪っていく。

闇は光を奪っていく。

遠くの方で野良犬が吠えている。

それは僕には関係なくて。

つながりを持たないものの一つ。

その無関係さが寒々しくて、身が凍えそつだ。

誰かと繋がっていたくなって、動かない携帯を握り締めた。

動かなくなっただけから、僕はこの箱を捨てられずにいる。

いつものように反応のない携帯は、まるで放課後の廊下みたいに冷たくて固い。

空気が音もたてずに震える。

他愛のない昼間の会話を考えたり、僕がいった意味のない冗談を思い出そうとする。

けれども、どれひとつ思い出すことができない。

奪っていった熱と一緒に何かが失われた。

「寒くなる前に帰ろうか。」

誰に云うでもなく僕は云った。

まるで、いままで友達とカラオケをしていて、楽しくて時間を忘れていたかのような…

明るいコエで…

「ただいま」

と行ってドアを開けなければならない。

僕はドアノブに伸ばした手に力を入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5067a/>

駅前

2011年1月19日23時24分発行